

2004年6月16日

徳地学生工房への期待

安溪遊地（山口県立大教員）

背景

地域と大学が手をつな意味について、私は、次のように考えています。

「少子高齢化の荒波にもまれる大学、とくに地方の小規模大学は地域からあてにされなくなったらおしまいです。地域の側も、若者がそこでのライフスタイルに魅力を感じてくれないければ未来はありません。」（『やまぐちは日本一』の冒頭のことば）

主人公は学生であり住民です

大学も自治体もコンサルタント会社も、それぞれの存在理由や、経営の目標があります。リーダーや構成員の意向もあるでしょう。

しかし、大学の主人公は学生です。地域の主人公は、（そこに骨を埋めるつもりで真剣に生きている）地域住民です。その人たちの希望や生きる喜び・学ぶ喜びこそが大切にされなければ、いかなる開発計画や提携のプランも無意味です。また、それぞれの組織を存続させる意味もない、と考えています。

目標

だから、いま県立大に在学中の学生のみなさんには、地域とふれあいながらいきいきと学べて、「もう一度学ぶ機会があれば、またこの大学で」と思えるような取り組みを展開していただきたいと思います。後輩たちにとってもいい道を開いてほしい。山口県内の他の地域にもお手本になるような動きを生み出してほしいのです。

地域の人たちには、学生がいることで何かが変わる、という実感をもっていただく機会があれば、と願っています。どこまで地域の若者を励まし、ともに歩むことができるか、がその地域の将来を決定することでしょう。